ひり出せ糞！

What's in a name?

星泉（ほしいずみ）　東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所教授

チベットの牧畜民はヤク（高地に適応した毛の長い牛）や羊、ヤギ、馬などの家畜とともに暮らしている。そんな彼らにとって、家畜の糞はとても身近な存在だ。ヤク糞はフチヤ、羊とヤギの糞はリマ、馬糞はフトゥルと名前もよびわける。身の回りのものを何でも上手に使いこなす彼らは、糞もそのまま放ってはおかない。量も多く、成形しやすいフチヤが一番使いでがある。乾かして燃料にするのが一般的だが、積み上げて風よけの壁にもする。一度凍らせると硬くなる性質を利用して、昔は調理台やら高坏（たかつき）、テーブル、雪遊び用のそり、子どもが乗って遊ぶ木馬ならぬ糞馬など、いろいろなものを作ったという。フチヤを箱型に成形して凍らせたら、肉を貯蔵するのに使う天然の冷蔵庫のできあがりだ。羊やヤギのコロコロした糞は乾かして燃料に。馬糞は燃料にはしないが建物を作るときの土に混ぜ込んだりする。

なかでもヤクの糞は特別で、たくさんの名前がある。フチヤは未加工の糞の総称に過ぎない。例えば、夏の芝草をよく食べた時期の糞はンゴフチ、土や枯れ草を舐（な）めるしかない冬の時期の糞はナクルクという。また、〇歳の赤ちゃんヤク（ウィル）の糞の総称はウィルフチというが、さらに細かくいうと生まれたての仔（こ）ヤクの糞はツェンブ、初乳を飲んだ直後の仔ヤクの糞はフティフトゥク、初乳は終えたがまだ草を食べていない仔ヤクの糞はオフトゥクと言い分ける。水分の多寡など糞の状態による呼び名もある。排泄（はいせつ）したばかりの湿り気の多い糞、水分を多く含む糞、凍った糞などと枚挙にいとまがない。彼らがヤクの健康状態や成長過程にいかによく気を配り、また加工対象としていかに細かく観察しているかがよくわかる。

燃料用に加工した糞はオンワという別の名でよばれる。かまどにくべる糞を「フチヤ」とよぼうものなら大爆笑だ。オンワは総称で、成形の仕方によってよび分ける。集めたフチヤを手でつかみ、両の手首をぶらぶらさせながら地面に落としていき、均等な大きさにし、よく乾かしたものがツァブルク。ほかにも、小さめに丸めたタンルク、地面に薄く伸ばすタイプのコホクといった具合である。塊状のものは乾燥に数日かかるが、コホクはすぐに乾くので、テントを引っ越したばかりのときなどに重宝するという。ちなみにオンワはほんのりと草の香りがする程度で、燃やしてもちっとも臭くない。

糞加工は重労働だが女性が担当する。もっともたくさんオンワを作る時期は氷点下一〇度以下にもなる冬だというから驚きだ。草の多い夏は乳もよく出るので、女性たちは乳しぼりと乳製品作りに忙殺され、糞加工に割く時間があまりないのだ。冬の糞加工はひどくきついはずだが、そんなとき彼女たちの苦労を和らげているのが「出掛けの糞（ジョフチ）」。ヤクたちが朝、山に放たれる前にぶりぶりとひり出していくほかほかのあれだ。温かい糞は手にやさしい。働く女性たちの実感のこもった名前だ。